

【日時】平成28年10月20日(木) 14:00~15:00

【場所】公会堂15号室 (盛岡市内丸11番2号)

【配布資料】

- ・いわてNPO災害支援ネットワーク 設立趣意書
- ・台風10号における被害（INDSでまとめた資料）
- ・参加者名簿
- ・広報いわいずみ

■主催者挨拶

・・・いわてNPO災害支援ネットワーク 共同代表 多田一彦（NPO法人遠野まごころネット/理事）
8月末に上陸した台風10号の豪雨災害で被害を受け、支援活動に非常に苦労している。本州一面積の広い町で、支援者も点在しており、声が届きにくく、拾いづらい。
県外の一部からは「被害がたいしたことがないから、サポートする必要がないのでは？」といった声も聞こえる。まだまだ復旧・復興が進まない中で、被災地では冬を迎えてしまう。行政、社協も支援策を模索しながら進めている。我々NPOも東日本大震災の経験を今につなぐべきだと考えている。
今回は、みなさんに被災地の現状を伝える機会にしたいと考えている。言い忘れてのことあると思うので、皆さまからもご質問頂きたい。

■現在の岩泉について

・・・社会福祉法人岩泉町社会福祉協議会 会長 佐々木泰二氏
台風10号の豪雨災害に県内外からのご支援・ご協力大変有難うございます。私たちが台風10号の被災を受け、約1か月半が過ぎた。8月30日暑い中でのボランティア活動の開始であった。しかし、今では藪川では氷点下を迎える日もあり、岩泉も寒くなってきた。
このような現状の中で、人的被害が、死亡者19名、行方不明者2名、避難者322名（9月28日現在）、住宅被害が855棟、うち全壊399棟となっている。
一時は国道も寸断され、旧村単位で孤立、ライフラインも寸断され、まさに孤立した地域となってしまった。現在は、ホテル愛山、龍泉洞ホテルなどからの協力も頂き、また町民会館にも避難している。一日も早く自宅に戻り、あるいは仮設住宅に入れるよう、我々も支援活動していかないといけない。
震災から1か月半がすぎ、ボランティアは1万人を超えている。当初は泥出し作業、家具の出し入れなどの重労働が主だった作業であった。一次的な支援活動の進捗としては80%完了を超えるようになった。
冬を迎えるにあたり、はがしたままの床、梁についた泥もまだある。玄関までの家の周辺の泥もやらなければならない。細部にわたる支援をし、みなさんが心落ち着ける環境が整うまで作業をしなければならない。
被災者の中で、安家地区の80歳過ぎのおじいちゃんは、自宅が被災し、一人で10枚以上の畳を屋外に出していた。娘さんも町内で被災し、「俺まで頼むわけにはいかない」とボランティア要請を遠慮していた。また、その方のお昼はカップラーメンが殆どであった。沢からホースで水を持ってきて溜めている。その一軒を見ても、水道はきっとこの寒さで凍るだろう。オフロも入れない状況、トイレは仮設・・・。
まだまだ、ボランティア活動、支援活動も続けていかなければならない現状である。全てが終わったというわけではなく、緊急的な泥出しは終わったが、細部にわたる支援が必要だと思っている。

物資としても暖房器具も必要だと感じている。1家に1台ストーブを支援しただけでは到底カバーできない。

そういったことからまだまだ皆さまのサポートが必要である。

半壊だからと言って、すぐ住める状態ではない。床上、床下には泥が入っている。住める状況にするには、大工が工事に入るわけだが、その前に床上の家財だし、泥出し、床下の泥出しなどしなければならないがあり、できることをしなければならない。

寄り添うことが重要だと思い、自分自身では寄り添った支援をしてきているつもりだが、各地区が被災しており、自分の無力感を実感しながらも、職員に発破をかけながら、ボランティア、NPOからも支援・指導・協力してもらっている。

冬に迎えるにあたり、これを乗り越えてなんとか笑顔を少しでも取り戻してもらいたいと思っている。

私たちは小さい社協ではあるが、今後も皆様からのご支援も賜りながら前に進んでいきたいと感じている。

■現在の岩泉について

・・・社会福祉法人岩泉町社会福祉協議会 災害ボラセン担当 林脇夏奈美 氏

ボランティア活動の主な活動は、当初は泥出しであったが、次のステップとして細部にわたる作業が必要になってきた。詳しい内容は、家の中の泥出しをした後、梁や壁にまだ乾燥した泥がついているので、その清掃作業。

これをキッチンとやらないと、何年か経った後における原因になったり、木の腐りの原因になったりする。

せっかく直したのに、また床板を剥がさなければならないようにしないといけない。

応急的に母屋内・その周辺の泥出しだけだったので、今後、倉庫などの母屋以外の生活建屋も作業していかなければならず、まだまだ泥出しなどの力仕事のニーズも出てくる。並行して、泥出しが終わった家屋掃除など、女性や体力に自信のないボランティアでもできる作業もニーズとして出てくる。ボランティアも日々減ってきており、進み方に苦労していることもあるが、もう一度岩泉町に目を向けていただけたらと思う。

■広報いわずみについて

・・・社会福祉法人岩泉町社会福祉協議会 会長 佐々木泰二 氏

昨日役場から広報をもらってきた。表紙、紙面の写真は、5年前の東日本大震災時に見たような映像だと思う。

今回の災害では、流木、土石流があったが、皆さんのボランティア活動もあり、徐々に復旧してきている。

小山内はまだ道路が通っていない箇所もある。そこは道路も電気もまだまだでボランティアを入れられない。

ボランティアに入れば、被災者の皆さんは話をしたがらる。

被災者の一人で、家や畑、米を干すハセ場が被災したが、米はなんとか収穫でき、ガードレールを使って干していた。収穫できた喜びはあったようだ。こういったように、一人ひとりの話に耳を傾け、寄り添った支援が必要である。

■みなさんをお願いしたい事

・・・社会福祉法人岩泉町社会福祉協議会 会長 佐々木泰二 氏

一時的（応急的）な泥出しはボランティアの力で終わってきたが、日々、ボランティアの人数が減ってきている。

今後も泥出しに加え、細かい作業などボランティアの力が必要になる。昨日・一昨日で、一軒一軒各家庭を周り、ニーズ調査を行った。寄り添った支援、末永いご支援をお願いできればと思い、いわてNPO災害支援ネットワーク（INDS）と災害協定書を結ばせて頂いた。私たちの力が及ばない部分をサポートしていただきたい。

みなさんには、是非、岩泉町に目を向けていただいて、ボランティア派遣などにもご協力をお願いしたい。

■みなさんをお願いしたい事

・・・社会福祉法人岩泉町社会福祉協議会 災害ボラセン担当 林脇夏奈美 氏

被災から1か月半が過ぎ、ソフト支援も必要である。高齢の方が多地域なので、皆さんに声をかけると色々な話をしてくれる。今回の水害の話はもちろんだが、「昔はこうだったよ」などの昔話もしてくれる。聞き役として、普段の苦しいこと・悩んでいることを吐き出してもらい機会が重要かもしれない。

道路が寸断されていたが為に、会話の行き来がなく、孤独感を覚える方が多いと思う。若い方と居住している世帯は社会との繋がりや会話が生まれるが、高齢者のみの世帯になると人とのコミュニケーションを取る機会が減ってしまう。

■一時的なボランティア活動とは

・・・いわてNPO災害支援ネットワーク 共同代表 多田一彦（NPO法人遠野まごころネット/理事）
一時的（応急的）に主要道路へ続く通路、母屋内、母屋周辺の泥出しは終わったが、小屋、畑、ビニールハウス等の泥出しすら終わっていない。高齢化が進んでいる地域のおじいちゃん、おばあちゃん達だけでは対応が難しい。

被災者は、今日の前の必要なことしか見れない状況である。支援を受けることにも遠慮や気遣いもあるようだ。被災者本人が気づかない場合は、会話の中からや、他の人から見て掘り起こされたニーズも出てくると思う。

■質疑・応答

>ボランティアは、平日・土日の平均どのくらいか？

→岩手県社協ホームページにも毎日活動状況を載せ発信している。

10月17日（本部、小川、小本合わせて） 平日114名、土日200～300名くらい。

>ボランティアが減少してきているというが、先週、今週との数を教えてください。

→平日120名強だったので少しずつ減少してきた。

今週はニーズ調査のローラー作戦をしたので、週の数はかなり少なくなります。

>ニーズ調査をし、潜在的ニーズはもう少し増えそうなのか？

→極端に手つかずで増えることはないと思うが、普段不在である世帯等からは、新たなニーズは出てくると思う。1件1件の声掛けが必要だと感じている。各地区で2～3件増えていく予想をしている。

>ニーズ調査（発掘）をすると、ボラセン運営は同時にできないということか？

→日常的にもニーズ調査は対応している。今回は、多くのスタッフをニーズ調査にまわし、調査をした。

>冬を迎える前にボランティアに沢山来ていただきたいということか？

→県内外のボランティアに来ていただきたい。NPOの力も必要。行政だけに頼るわけではなく、みんなができることをやっていかなければならない。

>朝晩寒いと思うが、実際寒さに対する具体的なニーズはあるのか？

→安家地区には、NPOの支援でブルーシートで囲ったお風呂があるが、今後の寒さに備え、防寒対策も必要。

ストーブ、コタツが必要。1家に1台というわけではなく、寒さ厳しい地域なので、その世帯にあった支援をしていかなければならない。また、石油ストーブだけでなく、薪ストーブ、反射式ストーブなど、様々な防寒器具の支援も必要である。

＞在宅被災者も多いのか？

→今の支援体制を見れば、国なりから仮設住宅も支援してもらえらるだろうが、行政だけでカバーできない部分は呼びかけて対応していきたい。避難所・仮設住宅にも入らずに自宅修繕をしながら居住する在宅被災者もいる。特に、沢がある地区からは薪を使ったストーブの要求が多い。

＞今後、ボランティアに求められる「細かい支援」とは？

→今までは、泥出しなどの体力が必要な作業が主だったが、梁に付いた泥落としなど、目を行き届かせるところを細かくなってくる。今後再建する際に、今後安心して再建できると思う。

＞これまでは、「力のある作業＝男性メイン」なようだが、これからは女性がメインになるのか？

→一時的（応急的）に、母屋の中、その周辺の泥出し作業を行っていたが、まだまだ家周辺の泥出しも追い付いていない。梁についての泥清掃も必要だが、力仕事の泥だしもまだまだ必要である。

＞一般ボランティアへの支援方法としては？ I N D S への支援金？個人で物資送付？

→今までは役場で義援金受け入れていたが、社協へ支援金・物資を送ったりでもOKである。

お金と物資以外にも、傾聴のボランティアなど、個人のニーズにも対応していきたいと考えている。

ストーブを送るという方法もあるが、支援団体にそのお金を送ってもらえれば、岩泉町内の地元の電気屋さんで購入して、支援することもできる。地元の循環にもつながる。

＞行政の保健福祉的な支援と、そこに繋げる支援と連携が必要だと思うが？

→保健師でも応援職員が入っているが、期限がある。先日保健師と話したが、我々で保健師に通じる被災者の状況をお伝えしていきたい。行政は行政、社協は社協、NPOはNPOなどの線引きはやめようと我々は思っている。

＞あとどのくらいボランティアが入ると完了するか数字で出せるか？

→1回6名前後のボランティアをグループにして活動している。それに対応件数をかけると必要ボランティア数が出てくると思うが、1回で終わる場合と複数回訪問して完了するケースもある。また、日々の会話からニーズが掘り起こされる場合があるので、一概に出せない。

＞本日みたいな報告会をやっていただくと有難い。一般の県民がネットで見ると被災地の状況がわかるサイトはあるのか？（盛岡タイムス 尾崎）

→岩泉町災害ボランティアセンターのFacebookがある。I N D Sの報告会も今後も行おうと思う。

＞県内外からのボランティアや問い合わせはあるのか？

→今、高速道路無料期間なので、県内外からもボランティアに来ていただいている。

■岩手県社会福祉協議会より

応急仮設住宅への家電支援として、現在岩手県社協では、7000万規模支援金募集をしている。すでにイオングル

ープから1千万円の寄付があった。

■いわてNPO災害支援ネットワーク（INDS）設立について

・・・いわてNPO災害支援ネットワーク 共同代表 多田一彦（NPO法人遠野まごころネット／理事）
しっかりと根拠をもって岩泉で復興支援活動ができるように、岩泉町社協と協定を結んだ。有効なサポートができるよう社協と意見交換しながら進めている。それがINDS設立であり、今回の協定締結である。

いろいろな人が協力しやすい、支援に入りやすい窓口を作っていると思ってほしい。

※別添、設立趣意書参照

■いわてNPO災害支援ネットワーク（INDS）常駐スタッフより

・・・いわてNPO災害支援ネットワーク 事務局 大向昌彦（NPO法人いわて連携復興センター スタッフ）
行政、社協、NPOが支援団体とのマッチングやネットワーク形成を担当している。

岩泉町内のネットワーク構築としては、いわてNPO災害支援ネットワーク主催で、9月12日より「岩泉連絡会議」を開催している。第1回、第2回は不定期、3回目以降は毎週火曜夕方に社協2階を会場に開催している。参加者は主に、行政担当、ボラセン本部、小本サテライト、小川サテライト、NPO、個人ボラ、住民など20名程度参加。一昨日で第7回を数えている。

会議では、町内を6地区（岩泉、小本、小川、大川、安家、有芸）に分け、それぞれの地区ごとのボランティア作業の進捗、地区全体・個別のニーズを共有し、参加者を中心とした協力体制の元で、共有から解決へ向けた協議を行っている。

これまでの連絡会議で、ニーズ・課題として挙げられた事項としては、行政やボランティアセンターで受け入れが難しい重機ボランティア、炊き出しなど「スペシャルシーズに対する民間の受け皿の構築」。被災した家屋の泥出し・清掃に対する「作業完了基準統一」、家屋のカビ対策に対する住民の方々への周知資料の選定、などこれらに対し、会議内で共有され解決・実施されてきた。

現状の課題としては、在宅避難者への生活面・健康面のケアを最重要項目と捉えている。配布資料にあるボランティア状況にも記載がある通り、キッチンの使えない方々の食事の方よりがとても目立っている。1階が被災し2階で生活している方々の多くが、床下の泥出し・消毒を終え、乾燥の段階に入っている。一般的には半年近く乾燥の期間をおかなければならない。ということは、1階を空けたまま冬を越さなければならぬ可能性がある家屋が多く、寒さ対策が急務となっている。このような課題を会議の場内外においても、参加者、関係各所と連携して、解決に向け取り組んでいる。INDSの活動状況はFacebookでも発信している。

【報告会当日の様子】

